

それでは**ガラテヤ人への手紙**をお開き下さい。**1 章 6 節**から今日は見参ります。テーマは恵みです。**ローマ人への手紙**が恵みの福音書とするならば、この**ガラテヤ人への手紙**は恵みの書簡。ちょうどパウロが書いたような書簡に相当するものであります。恵みという言葉が 6 章からなるこの**ガラテヤ人への手紙**の中には、7 回使用されています。先週はこの手紙のアウトラインを皆さんにはご紹介しませんでしたけれども、恵みという言葉を軸に簡単にこの手紙をアウトラインしますと、**1 章 2 章**がやっぱり恵みがテーマなんですけれども、パウロの個人的な恵みの体験、それが**1 章 2 章**にまとめられております。**3 章 4 章**は、パウロによる恵みの教理的説明というものがまとめられております。神学的説明と言っても良いかと思えます。最後の**5 章 6 章**は、パウロによる恵みの実践的奨励という内容です。恵みをただ頭で学ぶだけではなくて、恵みを実際に生活に適用する、当てはめるということをパウロは奨励しているわけです、勧めているわけです。アプリケーションということです。ですから**1 章 2 章**は、パウロの恵みの体験について。**3 章 4 章**は、パウロの恵みの教理的説明。そして**5 章 6 章**はパウロの恵みの実践的奨励ということで、全部共通しているのは、恵みです。恵みのことしか語っておりません。しかし同時にこの手紙は、最もパウロらしい手紙とされています。それは、勿論パウロが一番強調したかった信仰義認というやはり恵みの教理が打ち出されているというだけではなくて、パウロの感情も豊かにこの手紙の中に込められております、溢れております。普段は口述筆記という形で自分が語ったことを人に書かせるというスタイルをとっていたんですけれども、この手紙だけはパウロが自らの手で書いたもの。目が悪かったのにもかかわらず、大きな字で、たどたどしい字で、心を込めてこの手紙をパウロは書きました。なぜそこまでしたかと言いますと、折角恵みで救われたクリスチャンたちが行いによって信仰生活を続けようとし、信仰義認から行為義認へ彼らは間違った方向へと、間違った教えによって引き込まれそうになっている。恵みが台無しにされてしまっている。恵みがないがしろにされてしまっている。そのような実態に対してパウロは憤りを感じているわけです。「**なん**ということ。」そのような教えが、所謂律法主義者と呼ばれるユダヤ教の律法に厳格な人たち、自らを敬虔で霊的で熱心な働き人と自称する人たちによって持ち込まれたわけであり、彼らのことは「**かき乱す者たち**」とか、または「**福音に反することを教える者たち**」そんな彼らに対して非常に厳しい言葉をパウロは使っています。恵みをテーマにしながらも非常に厳しいハッキリとした断罪の言葉も使われているような内容でありますので、その意味においてもパウロらしい、最もパウロらしい手紙というふうに言われているわけであり、書かれている先は、ガラテヤ人とありますけれども、ガラテヤというローマの属州に宛てられた手紙ですから、そこにある複数の町の教会にこの手紙は宛てられて、回覧板のようにしてまわされました。

ガラテヤ人という人たちの特徴も皆さんには先週お話ししました。ユリウス・カエサルがこのガラテヤ人のことを「**すぐに心変わりする人たち。コロコロ態度を変える人たち。だから信用ならない連中である。**」と。実際に今日見るテキストの**6 節**にも、その彼らの特質、性質、性格というものを見ることが出来ます。**6 節**に『**私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。**』急に見捨てる。急に態度を翻す。急変する。豹変する。<sup>てのひら</sup>掌をコロっと返すような、そういう人たちがガラテヤ人であると。結構こういう人たちが教会にはいます。すぐに態度をコロっと変える。折角恵みで救われたのに、恵みだけでは不十分である。新奇な教えに心がなびいてしまうわけです。信仰だけで充分なのに、そこに行いもプラスアルファしなければ救われないとか、若しくは救いを失ってしまう、霊的にはなれないと。そのような他の福音を説く者たちが現われたわけであり、そのような人たちに対してパウロは断罪の言葉をこの手紙で述べていますけれども、それは非常に手厳しいものです。「**のろわれるべきだ。**」とか、「**そんな者は、切り取られたほうが良い。**」具体的には、男性の性器が切り取られる。不具になった方が良いと。そういう言葉も使われているわけです。そのような非聖書的な教えを持ち込む偽教師たちの出現について、パウロはあらかじめ警告も与えていたはずですが、にもかかわらずガラテヤ人たちはすぐに心変わりして、そのような新奇の教えに揺れ動いてしまったわけであり

ます。ですから、彼らのこともまた戒めながらも、もう一度原点に戻るように。私たちはどこから救われてきたのか。キリストの恵みをもって私たちは召された、救われたんだということを確認しつつ、そこから外れているならばもう一度そこに速やかに立ち戻るように。つまり悔い改めるように。そのようにパウロはこの手紙を通じて促しているわけであります。

**6 節の「ほかの福音」という言葉を、皆さんに今から説明をしていきたいと思うんですけれども、もう既に先週も見ましたように、「信仰義認だけでは不十分である。割礼を受けなければ、律法の行ないを守らなければ、食物規定を守らなければ、人は救われない。」とか、救いを維持出来ないとか、救いを失ってしまうとか。若しくは霊的になれない。祝福を受けられない。そのような教えをユダヤ教主義者という人たち、律法主義者と呼ばれる人たちが説いていたわけであります。行為義認のことを自己義認とも表現出来ます。自分の行いによって自分を正しくする。自分がこれだけ頑張っているんだから、神様に認めてもらえている。祝福を受けるに値する者となっている。それはすべて行為義認、自己義認であります。救いはあくまで神の賜物、フリーギフトであるということがパウロの手紙の中では何度も説かれております。救いは神の賜物であって、私たちの行ないに対する報酬ではない。無償で与えられるギフトです。フリーギフトである。これについてはヨハネの福音書 6:28~29『<sup>28</sup>すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを(若しくは神の行ないを)行なうために、何をすべきでしょうか。」<sup>29</sup>イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること(神が遣わした者というのは、勿論イエス・キリストのことです。)、それが神のわざです。」(若しくは神の行ない、神の働きです。)]原語では 28 節の『神のわざを行なうために』の「わざ」というのは複数形です。ですから英語の聖書ではこの「わざ」を“works”と訳しています。workにsの複数形です。一方 29 節のイエスが言われた、ただ一つの、単数形の「神のわざ」は勿論英語では work であります。これは前にも皆さんに何度もお話しているところです。28 節の方は複数形です。人々は沢山の、複数の神のわざわざをしなければ救われないと。わざわざいろいろなことをしなければ救われないと。そんなふうに彼らは思っていたわけです。ところがイエスは、そういうわざわざは要らないと。ただ一つのわざで良し。単数形です。それはイエス・キリストを信じるだけで救われる。これが恵みです。これが、パウロの強調したかった信仰義認、justification の教理であります。ですからエペソ 2:8~9 にもパウロはこう言っています。『<sup>8</sup>あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。(正確には、恵みによって信仰を通して救われたのです。)]それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。(あくまでフリーギフトである。)<sup>9</sup>行ないによるものではありません。だれも誇るものないためです。』行ないこそ恵みの反対語であります。行いに走っている限り恵みは分かりません。恵みは体験出来ないのです。行いに躍起になっている限り、恵みに浴することは出来ません。落ち着いて、リラックスして、感謝に、喜びに溢れて、恵みを体験することとは決して出来ないのです。あなたが行いに<sup>とら</sup>囚われている限りは。私たちは恵みによって救われました。恵みとは分不相応な者に対する過分な親切であります。私たちは、救われるに全く値しない者であったわけですが、にもかかわらず救われたわけです。恵みは、当然受けるべきでないものを受けることであります。一方憐れみは、当然受けるべきものを受けないこと。罪人として当然受けるべきものは、裁きです。それを受けないことが憐れみです。でも、恵みは更に 1 歩、もっと積極的です。憐れみの方はどちらかというと消極的ですが、恵みの方はもっと積極的で当然受けるべきでないものを受ける。それが恵みです。永遠の命、それは私たちが当然受けるべきものではありません。神の子どもとされる特権。神の御子を殺した殺人犯の私たちが神の子どもとされる。これは恵みでしかありません。憐れみは罪を赦されて無罪放免されるということです。本来死刑なのに、死刑を受けない。本来地獄に落ちるのに、地獄に落ちない。これが憐れみであります。恵みは更に 1 歩進んで、そこから出てきた私たちを子供として、神が養子として迎えてくださる。神の家族の一員に迎えてくださる。これが恵みであります。**

その恵みを全く無駄にして、破壊して、無きものとするような、そのような偽教師たち、ユダヤ教主義者たちに対して、パウロは烈火のごとく怒っているわけです。神様がそこまでしてくださった恵みの御業を、人の行ないによってすべて台無しにしてしまう。イエス・キリストの十字架の贖いの尊い死が、まるで犬死だったかのように、無駄死だったかのようにしてしまう。許さないと。激しい思いです。それがこのガラテヤ人の手紙の中に表されております。それ

が『ほかの福音』というものです。『ほかの』という言葉はギリシャ語で「ヘテロス」“heteros”という言葉です。「ヘテロス」という言葉は、「ほかの」という意味なんですけれども、特に「異なった性質のもの、異種、異質」という言葉です。この「ヘテロス」という言葉は、今日“ヘテロ・セクシャル”なんていう時にも使っております。“ヘテロ・セクシャル”というのは、異性愛者のことです。異性愛者というのは勿論普通の人たちです。健全な人たち。男が女を愛する。女が男を愛する。それを異性愛者。そんなことをいちいち言葉にしなくても良いじゃないですか、と思うかもしれませんが、同性愛者がいるので異性愛者という言葉が必要になったわけです。同性愛者、“ホモ・セクシャル”と言います。「ホモ」というのもギリシャ語から来ています。それは、同じ愛という意味になります。同性愛、“ホモ・セクシュアル”に対して、“ヘテロ・セクシャル”異性愛者という言葉が今日使われているように、それは異なった性質のもの。まったく異種のもの。ですから本物の福音とは全く異なった性質の福音を説いているということです。全く異質の福音、異種の福音を説いている。

そしてもうひとつ 7 節の方にも目を留めて下さい。『ほかの福音といっても(ヘテロスの福音といっても)、もう一つ別に福音があるのではありません。』この「もう一つ別の」という言葉は、ギリシャ語で「アロス」“allos”という言葉です。「アロス」というのは「ヘテロス」とは違いますが、「同じ性質のもので異なるもの」福音がいくつもあるわけではないということです。似たような福音が複数あるのではないと言っているわけです。同じ性質のもので異なる別の福音が存在するのでもない。分かりやすい例としてヨハネの福音書 14:16 に「アロス」という言葉がギリシャ語で使われていて、そこにはイエスが「もうひとりの助け主」すなわち聖霊を与えられるという約束があります。「もうひとり」というところが「アロス」です。イエスに似たイエスと同じ性質の助け主。イエスも助け主と呼ばれているんです。ですから、イエスと同じ性質のもうひとりの助け主が聖霊であります。「ヘテロス」ではないのです。イエスとは全く異なる質の助け主ではないのです。この「助け主」という言葉は、「弁護する者」というふうにも訳されます。イエスは、弁護する者とも呼ばれています。ですから、福音というものは、たった 1 つしかないのです。異なる性質の、異質の、異種の福音など勿論存在しませんし、似たような性質のものでいくつもあるわけでもないと言っているわけです。真理は 1 つしかありません。ですから福音も 1 つしかないのです。イエス・キリストは真理なるお方です。「私が道であり、真理であり、命です。」と、おっしゃいました。いくつも道があるわけではないのです。いくつも真理があるのではありません。いくつも命があるのではありません。たった 1 つです。そして今日見るテキストの中に「イエス・キリストこそ福音そのものである。」イエスが 2 人いないように、福音も 2 つはないわけです。イエス・キリストこそ福音です。福音とは、最も端的に定義するならば、それはイエス・キリストであります。福音とは勿論良い知らせ、喜ばしい知らせ、朗報、グッドニュースです。それはイエス・キリストご自身のことです。ですから私たちは「福音を宣べ伝える」という言葉と、「イエス・キリストを宣べ伝える」という言葉を同義的に使うわけです。勿論細かい福音の内容というものは、いくらでも説明出来ますけれども、一番端的に説明すれば「福音とはイエス・キリストである」と。

また 6 節の方に目を戻して頂きたいと思います。ですから、この「ほかの福音」、ヘテロスの福音、全く異なる異質の異種の福音というのは、「恵みだけで救われるのではない。行いもプラスアルファしなければいけない。信仰義認だけでは不十分。行為義認が必要である。」これがほかの福音であります。割礼を受けなければ救われぬ。きよくなれない。霊的になれない。律法の行ないを守り行なわなければ救われぬとか、そういう教えが、ほかの福音です。ですから、信仰プラスアルファとか、恵みプラスアルファ、福音プラスアルファ、聖書プラスアルファ。そのプラスアルファがなければ不十分である。救われぬ。それは完全にほかの福音です。7 節にも『ほかの福音といってももう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。』キリストの福音を変えてしまおうとする。そのような異端的な教え、危険な教えがもう既に 2000 年前の教会の中にはびこっていたわけでありまして。そして、このような動きというのは、勿論 21 世紀の私たちの時代にも見られるものであります。ですからこの手紙は現代の教会にも適用できるもの。私たちが回覧して回すべきものということです。信仰プラスアルファ、恵みプラスアルファ、福音プラスアルファ、聖書プラスアルファ。例えば同じキリスト教と呼ばれるグループの中にも、ローマカトリック教会というところでは「聖書だけでは不十分である。」と教えて

います。聖書＋聖伝が必要である。聖なる伝承というのが聖伝というものです。その聖伝という内容については今細かく見ることは致しません。それは教父と呼ばれる、使徒たちの弟子たちが教父と呼ばれたんですけれども、そのような古代の偉大なクリスチャンたち、神学者たち。彼らの教えであったり、その後に教会会議というものが繰り返し開かれました。それを公会議こうかいぎとも言います。そういうところで決められた教理、それは必ずしも聖書的なものばかりではありません。当時の伝統や当時の権力と結びついた都合の良い解釈に基づくもの、私的解釈に基づく教理というものも決定されていたのですが、そのような聖書に反することまでも「これは教会の伝統である。伝承である。守り行い、継続して伝えるべきものである。」ということで「聖伝」としてまとめられていったわけです。その中には、ローマ教皇の絶対的な権威、最終権威というものも確認されたわけです。これは聖書と同等の権威があると、聖伝の中で定められているわけです。最近も新しい教皇が決まったばかりでありますけれども、でも、ローマカトリックの教理で言えば、ローマ教皇とは教会の頂点に立つ頭かしらです。聖書によれば、教会の頭はイエス・キリストでありますけれども、ローマカトリックにおいては教会の頭はイエス・キリストではなくて、ローマ教皇その人です。そして、ローマ教皇とはペテロの後継者です。そして面白いことに、**ガラテヤ人への手紙**ではその初代教皇と見なされているペテロがパウロに叱られているわけです。教皇は過ちを犯さない、間違った事は言わないという**教皇無謬説**なんていうものもありますけれども、それが間違いだということが、この**ガラテヤ人への手紙**の中からも知らされます。いずれにしてもローマカトリックはキリスト教を標榜しながらも「聖書だけでは不十分である。聖書＋聖伝がなければいけない。」そしてその聖伝の中には先ほど言った教会教父たちの教えや、歴代のクリスチャンたちの伝承、公会議による決定教理というもの、そういったものが含まれるとともに、後はもう一つ**第二正典**と呼ばれるものも含まれています。第一の正典が聖書 66 巻を指します。旧約聖書 39 巻、新約聖書 27 巻を合わせて 66 巻を私たちは聖書と見ていますが、ローマカトリックではそれを**第一正典**と見なします。第一正典があれば、第二正典があるということです。その第二正典というのは、プロテスタントでは**偽典**とか**外典**、**アポクリファ**と呼んでいるものであります。正典ではない。正しいものではなくて、むしろ偽の偽典であるとか、外部の外典であると。それが 66 巻に加えられて第二正典としているのが、カトリックであります。その偽典、外典というのを 7 つ彼らは挙げております。勿論 7 つ以上も彼らは主張しているんですけれども、一応プロテスタントとカトリックの共同で使われている新共同訳聖書の中には、旧約聖書の続編という形でこの第二正典が加えられております。そして、これはバージョンが分かれていまして、新共同訳聖書をプロテスタントで使う場合は、その続編がカットされているものがあります。カトリックは、続編を含めたものを使ったりするわけです。それはカトリックの側でプロテスタントに配慮したものであります。ですから 66 巻だけではなくて、プラス 7 書。それで彼らはそれを聖書と呼んでいるわけです。そして、その第二正典と呼ばれるものは所謂正教会、ギリシャ正教会とか、ロシア正教会とか、またエチオピア正教会とか。オーソドックスというふうにも呼ぶグループがあります。そのギリシャ正教会もキリスト教の中ではローマカトリックと並んで大きな勢力を持つグループです。その正教会ですらやはり第二正典を使っているわけです。そして、正教会の立場は「聖書は聖伝の一部である。」と。ですから、聖伝の方が大きくて、聖伝の方が権威があって、その中に聖書が含まれているという捉え方です。カトリックの方では「聖書と聖伝。これは 2 つ別個のもので、両方とも同等の権威がある。」と。一方でギリシャ正教会をはじめロシア正教会、オーソドックスと呼ばれるグループは「聖書は聖伝の中に含まれる。」という立場であります。ですから聖書の権威ということさらに強調することはありません。

そしてもうひとつキリスト教の中で大きなグループというのが、私たちの属するプロテスタントというグループです。大まかにキリスト教と言えば、ローマカトリックと、その正教会、そしてプロテスタントの 3 つになります。昔は日本でキリスト教の**旧教**と言ったらカトリック、**新教**と言ったらプロテスタント。日本では正教会は馴染みが薄いかもしれませんが、北海道とか函館あたりに行けば馴染みのあるもの。東京もいくつも大きな正教会の教会があります。かつては長野にもありました。そして、そのプロテスタントでは「**聖書のみ**」というのが特徴です。「ローマカトリックで使われている聖伝、これはおかしい。それが聖書と同等の権威があるなど、これは間違っている。ローマ教皇が最終権威なんて、おかしい。」カトリックの修道士であった、また神学者であったマルティン・ルターは異を唱えたわけです。そして

「聖書に立ち返ろう。」それが宗教改革、” Reformation”と呼ばれるムーブメント、運動だったわけです。それを抗議する形にしたわけです。ですから**抗議する者**、それがプロテスタントというグループです。ですからプロテスタントというのは本来はカトリックから派生したグループです。そのような動きをカトリックは嫌って、聖書の権威に立ち返られたらローマ教皇の権威なども無いに等しいわけです。司教だとか、大司教なんていうのは、もう名ばかりの者たちになってしまうわけです。聖書では万人祭司という神学の立場を聖書から見出してありますので、上下関係、階級制度、位階なんていうものはないんだと。だからローマカトリックは崩壊してしまうわけです。ですからローマカトリックではプロテスタントを破門したわけです。ルターを破門したわけです。そこでしょうがなく新たにプロテスタントというグループが生じたわけです。昔はプロテスタントと自らを呼んではいませんでした。自らはカトリックのつもりだったわけです。カトリックの中で聖書に純粹に従う者たち、聖書の権威を最終権威と認める人たち。彼らはドイツでは「**福音主義の者**」と呼ばれていたわけです。いわゆる**福音派**というのが本来の彼らの呼び名だったわけです。福音派というのは、聖書に厳密な人たち。それがプロテスタントの源流にあるわけです。底流にあるわけです。プロテスタントという人たちは、本来は福音主義で聖書に厳密・厳格な人たち、聖書から外れたことを忌み嫌う人たち。そして聖書から外れる者に対してプロテストする、抗議する者たち。それが本来のプロテスタントの呼ばれる人たち。何度も「**本来の**」と言っているのは、今日そのプロテスタントですら聖書に厳格ではなくなってしまった。後でその話も少ししたいと思います。ですから私はプロテスタントに対してプロテストしたいというふうに願っています。聖書から外れていることはハッキリ指摘して、それを私たちは正直に認めなくてはなりません。そして、それを捨て去らなければいけません。たとえそれが教会の伝統だろうと、世界の主流であろうとも。その結果、異端視されたとしてもです。ルターのように破門されるようなことが、除名されるようなことがあったとしてもです。そのようなプロテスタントの源流というものを皆さんにもしっかりと覚えて頂きたいと思います。

そして、それに加えてお話ししたいことは、この「**ほかの福音**」は「信仰だけでは救われない。行いも必要である。律法を守り行うということ。これが欠かせない。」と。カトリックにおいても勿論イエス・キリストを信じるだけでは不十分というふうに教えて、「洗礼を受けなければ救われない。バプテスマを受けなければ救われない。」洗礼だけではなくて他にもカトリックにおいては、堅信、聖体(聖体拝領とも言います。これはプロテスタントでは聖餐式と呼んでいるものです。)、結婚(カトリック同士で結婚すれば救われる。逆に離婚したら救いを失う。)、叙階(この叙階というのは所謂聖職者制度です。司祭になれば、神父になれば救われる。)、赦し(告解とも言います。一般的には懺悔などとも言います。それによって救われる。)、病者の塗油(寝たきりの病人、もういくばくもないそういう人たちに対して油を塗る。最期死ぬ前に油を塗られれば救われる。)それがカトリックの教えです。「イエス・キリストを信じるだけでは救われません。イエス・キリストを信じなくても、逆に言えばこれらの行いをするならば救われる。」カトリックはそれらを7つの秘跡と呼んでいます。 sacrament”とも英語で言います。洗礼、堅信、聖体、結婚、叙階、赦し若しくは告解、そして病者の塗油。もう死にそうな人も最期に油を神父に塗ってもらえば救われるというものです。別にイエス・キリストを信じなくても、儀式さえ終えれば救われる。赤ちゃんでも幼児洗礼さえ受ければカトリック信者として救われる。それは聖書の説く救いではありません。恵みによる救い、信仰を通しての救いではない、信仰義認ではないということです。明らかに行為義認であります。そして、それは聖書でパウロが言うところの「**ほかの福音**」です。ですからカトリックの教理は、救いの教理は「**ほかの福音**」とハッキリ言うことができます。パウロはそういうグループを異端と言うわけです。のろわれるべきと言っているわけです。厳しいですね。

でも、プロテスタントと呼ばれるグループの中にも「洗礼を受けなければ救われない。」と説くグループがあるわけです。残念なことですが、ルターの流れを汲むルーテル教会。公式には「洗礼を受けなければ救われない。」と言います。またはイングランドの国教会、聖公会とも言います。「洗礼を受けなければ救われない。」と説きます。プロテスタントと呼ばれるグループ、聖書に本来厳格だとされるグループの中でも「洗礼を受けなければ救われない。」と説いているグループが沢山あります。ルーテルとか聖公会というのは、プロテスタントの中の主流派と呼ばれるグループで、最も数の多いそういうグループであります。多数派と言って良いと思います。

そして、正統派の所謂十字架を掲げるような伝統的なキリスト教会だけではなくて、完全にキリスト教系の異端と呼ばれるグループも勿論「ほかの福音」を説いているわけです。それらの異端は、元々は伝統的な正統派のプロテスタントから派生したグループです。それらの異端の創始者たち、教祖と呼ばれる人たちは、元々プロテスタントの教会に通っていた人たち。そこで信仰告白もし、洗礼も受けていたような人たち。そこでまた奉仕などもしていた人たち。そういう彼らが「ほかの福音」を説くようになって、彼らが教会で拒否されたので、異端として新たなグループとなっていったわけです。

その典型的な3つのキリスト教系の3大異端。それが、エホバの証人、モルモン教、統一教会というものです。この話も皆さんには何度もお伝えしておりますけれども、改めてもう一度確認をしたいと思います。エホバの証人、正式名は『ものみの塔聖書冊子協会』聖書という言葉を使っています。彼らは“教会”という言葉を使いません。その代わり“王国会館”kingdom hallと英語で言いますが、そういう宗教施設を持っております。そのエホバの証人、若しくは『ものみの塔』と呼ばれる人たち。聖書という言葉を使っているわけです。『ものみの塔聖書冊子協会』自分たちこそが真のクリスチャンである、と彼らは主張します。「カトリックだとかプロテスタント、彼らは聖書から外れた人たち。世俗化した人たち。聖書に厳密でない、厳格でない人たち。」と。彼らから見ると私たちは、聖書から外れた世俗化した堕落した者たち。救われていない自称のクリスチャン、というのが彼らの観点です。でもそんな彼らでありながらも、使っている聖書は彼らの教理に合わせた改ざんされた聖書です。元々は勿論このグループはアメリカで派生したんですけれども、アメリカでは欽定訳聖書を使っておりました。King James version を使っていたり、また今でもプロテスタントではよく使われている聖書を彼らは最初是使用していたわけですけれども、でもその聖書を使うと彼らの教理に都合の悪い訳があるわけです。表記があるわけです。ですから彼らは近年になって聖書を書き換えたわけです。そしてその聖書こそが最も原典に近い、原語に忠実な聖書だと主張する『新世界訳聖書』というものです。内容はボロボロなものです。改ざんされているもの、改変されているものです。その辺を今詳しく見ることは致しませんけれども、彼らは聖書を重んじると言いながら、自分たちの新世界訳聖書だけではなくて、プラス『聖書の研究』という独自の言わば経典というものも重視しております。『聖書の研究』というのは全部で7巻から成るもので、その『聖書の研究』というものがないと聖書を正しく学ぶことは出来ない。ですから新世界訳聖書の内容を補強するものとして、その聖書と同等の権威があるもの。それが彼らの言う『聖書の研究』という全7巻から成る経典です。ですから、やはり聖書プラスアルファなんです。イエス・キリスト以降神に特別に選ばれた14万4,000人の人たちだけが天に入ると。所謂天国に行けると言います。それ以外の人たちは天国には行けません。地上の楽園で暮らすことになります。ですから選ばれた人たちしか天国には行けないんです。でも聖書で14万4,000人というのは、黙示録に出てきますけれども、それはイスラエル人です。そして、エホバの証人が言うところの救いの条件は、信仰だけではありません。恵みだけではありません。聖書だけではありません。彼らは聖書研究というものを始めて、伝道者となって、そして1人平均大体月に40時間伝道活動・布教活動をした上で、大体3~5年それを続けるとようやく晴れてエホバの証人として認められて、バプテスマを受けることが許されます。そこで初めて所謂聖員というふうにして認められます。ですから、行いが必要なんです。行為義人です。聖書研究を始めて、伝道者として大体月に平均40時間伝道活動をした上で、3~5年経ったらようやく認められてバプテスマを晴れて受けることが出来ると。そのような、訪問伝道をしなければ救われない。それがエホバの証人の説く救いです。しかも救われても天国には行けないのです。地上の楽園止まり。後は消えるだけです。消滅するということです。

モルモン教については、正式名は『末日聖徒イエス・キリスト教会』と言います。“イエス・キリスト教会”という名前を使っております。彼らも聖書を聖典として使いますが、それだけでは不十分である。聖書プラス。日本では大体彼らは口語訳聖書を使っておりますけれども、聖書プラス『モルモン経』若しくは『モルモン書』というものを使います。それだけではありません。『教義と聖約』という書物、もう一つは『高価なる真珠』。この3点セットが、聖書プラス必要であると。そして、モルモン教が説く救いもやはりエホバの証人と同じく、行為義認です。

異端の特徴はすべて行為義認です。行いによる救いであります。エホバの証人も「イエスを信じる。」と言います。

モルモン教も「イエスを信じる。」と言います。そしてモルモン教徒は自らを「私たちは born again Christian だ。新生したクリスチャンだ。」とすら言います。後で話しますけれども、彼らの言うイエスは、聖書のイエスとは違います。エホバの証人のイエスは神ではありません。神によって造られた被造物です。大天使ミカエルがその実体であります。モルモン教で言うイエスも、これも神ではありません。モルモン教のイエスは、やはり神によって造られたもので、これは元々はルシファーのお兄さん。ルシファーというのは後にサタンに墮ちるものです。ですから元々御使いだったのですが、その御使いがいつの間にか神様になってしまう。そして、モルモン教はすべて最終的には神となる。それがモルモン教の救いです。ですからモルモン教は多神教です。エホバの証人は、エホバしかないと言って一神教を説きますが、モルモン教は「信じるものは全員神になる。神々となる。」多神教です。

そして、その神となるためには、救われるためにはどうするのか。彼らは救いのことを「昇栄」と言います。天に昇るのですが、そこで天の家族の一員となる。それがモルモン教の救いです。そのためには、イエスを信じてバプテスマを受けて、モルモン教徒同士結婚しなければならない。モルモン教徒同士結婚したら、将来は神々となってアダムとエバのように惑星が与えられて、そこで子供たちを、子孫を増やして、宇宙で栄えると言っているわけです。ですからそのためには、まずはイエスを信じてバプテスマを受けて、結婚して、そのバプテスマは死んだ者のためにも受け取ります。死者のためのバプテスマも受け取ります。ですから、死んだ者のためにもバプテスマを受ければ、その人もモルモン教徒になるわけです。救われるわけです。救われた者は義務として、聖なる下着を着なければいけません。英語でガーマントと言います。ですからモルモン教徒の人たちは、全員特別な下着を着けています。見せて下さいと言っても見せてくれませんが、売っています。特別な下着を着けているんです。勿論有名なところでは、コーヒーも、紅茶も、お酒も、タバコも体に害として、それらを食べてはいけないといったいろんな細かい戒律がモルモン教にはあります。

もう一つ、統一教会。正式名は『**世界基督教統一神霊協会**』と言います。“<sup>きりすときょう</sup>基督教”という言葉を使っています。ただし、統一教会と表記する場合は“教会”と書きます。ですから英語の名称でも“church”という言葉を使っております。この統一教会も聖書を使いますが、聖書だけではダメです。プラスアルファ『**原理講論**』が必要です、と言います。原理講論によれば、聖書は真理ではなく消えゆく教科書であると、文鮮明が言っております。ですから聖書よりも原理講論の方が勿論権威があるわけです。ただ近年になって2001年からは、原理講論よりもさらに重要な経典がもう一つ加わりました。それは『**天聖經**』というものです。これは文鮮明の教理がもっと詳しく書かれている、原理講論に肉付けしたような分厚い書物です。ですから今は統一教会では、この天聖經が最も分厚い経典として重んじられているわけです。文鮮明の説教集と言っても差し支えないと思います。それが聖書以上に権威のあるもの。勿論文鮮明は最近死にました。でも、彼は再臨の主、メシアであると自称して、文鮮明を信じる者は救われると。そして勿論救われるためには行いも必要であるということです。ですから合同結婚式、祝福結婚式というものも行いますし、その結婚式によって真のお父さんお母さん(文鮮明とその妻 <sup>カクハンジョ</sup>韓鶴子です。)、その2人を真のお父さんお母さんとして神の家族とされることが統一教会の救いでありました。文鮮明と韓鶴子、この夫婦は神のようにして崇められていますけれども、文鮮明は離婚歴があります。この韓鶴子は3番目の妻であります。ですから、この文鮮明が説く統一教会の救いは、天の家族に加えられること。家族を非常に重んじる教えを説いていますけれども、その文鮮明の家族がもう崩壊しているわけです。息子や娘たち、骨肉の争いをしたり、また自殺未遂をしたり、変死を遂げたり、もうボロボロです。めちゃめちゃであります。勿論文鮮明自身も不倫も行ってありますし、めちゃめちゃであります。でも、その真の父母である文鮮明と韓鶴子と一体となるべく、合同結婚式に信者たちは駆られていくわけでありました。そしてもう一つ特徴として、神様が罪のために解決をくださったんですが、その解決は95%止まりで5%はまだ未解決であると。残っている。その後の5%の責任を信者たちが負わなければいけない。その“負わなければいけない”というのが、行いの救いの部分になります。合同結婚式とともにその残された5%の責任、これを果たすことで救われると。それを専門用語で彼らは、<sup>とうげん</sup>蕩減条件を立てる、と言います。放蕩を減らす。そのために何をするかという、上役の上司のリーダーの人たちにいろいろなことを命じられるわけです。珍味を売ってこいとか、壺を売って

こいとか、靈感商法をさせられたりとか、また献金しなさいとか。「日本はエバ国家であって、韓国はアダム国家である。だから日本は韓国に仕えなければいけない。」沢山の資金が日本の信者たちから韓国へ送金されているわけであり、そのような行いによって救われる。それが統一教会の教えです。エホバの証人にしても、モルモン教にしても、統一教会にしても、聖書プラスアルファ。信じるだけでは不十分。恵みなんかありません。行いのみです。全部これらは「ほかの福音」と呼ばれるもので、この「ほかの福音」はのろわれるべきもの。それを今から見たいと思います。

その前に 7 節の“かき乱す”という言葉にも着目して頂きたいと思います。“かき乱す”という言葉は 5 章 10 節にも使われています。『私は主にあって、あなたがたが少しも違った考えを持っていないと確信しています。しかし、あなたがたをかき乱す者は、だれであろうと、さばきを受けるのです。』かき乱す者は、だれであろうと、さばきを受ける。ほかの福音を説く者は、だれであろうとさばきを受けると。使徒の働き 15:24、ちょうど教会の第一回目の公会議、エルサレム会議が開かれた場面です。このエルサレム会議の直前に、このガラテヤ人への手紙が書かれたということをお話しました。そして、その結論の部分で使徒の働き 15:24 のところ『私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。』心を乱す。“かき乱す”と同じ言語「タラッソー」"tarraso"が使われています。かき乱す、かき回す、揺り動かす、動揺させる、不安定にする、平静を妨げる、静けさを乱す。そういう意味があります。この「タラッソー」という言葉は、船酔いする時に使う言葉でもあります。ですから同じ言葉がマタイの福音書 14:26 のところでも使われています。『弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。』おびえてしまい、\*印が付いていて欄外には“取り乱す”とあります。これが「タラッソー」です。取り乱す、動揺する。船酔いの状態もイメージして良いと思います。アップダウンが激しくて、揺れ動いて、気分を悪くしてしまう。吐き気がするような、そんな状態がガラテヤの教会の中に見られたので、パウロは怒っているわけです。怒っていいんです。でも怒り続けてはいけませんし、怒って罪を犯してはなりません。ただし、怒るべき時に怒らなければ、それも罪であります。ですから、それを義憤と言います。怒ったままでいいはいけませんし、怒って罪を犯してもなりません、怒らなければいけない時があるわけです。見て見ぬフリをするとか、波風立てないようにするとか、不問に付すとか、水に流すとか、なあなあにする。そういうことが許されないということも知って頂きたいと思います。それをすればどうなるのか。教会は腐敗し、崩壊します。

次にテキストに戻って頂いて 8 節 9 節。『しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。』私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。』2 回も繰り返しています。強烈な言葉です。『のろわれるべきです。のろわれるべきです。』と。それが、天の御使いが宣べ伝えたものでであろうと、と言っています。天使が殊更に持ち上げられるというケースがあります。実際にコロサイ人への手紙 2:18 では、御使いに礼拝を捧げるという、そういう異端的な教えも入り込んでいたことが示唆されています。またヨハネの黙示録 19:10、また黙示録 22:8~9、そこでも思わず御使いにヨハネが平伏して拝もうとする場面がありますが、御使いがそれを拒んでおります、止めております。拝むべきは神のみであるということで、当時御使いを拝んでしまう、そういう異端的な教え。御使いを殊更に持ち上げる、そういう動きが、異端的な教えが教会内にあったということも覚えて頂きたいと思います。でも、そんな御使いが啓示したメッセージであろうと、それはあくまで『ほかの福音』異質の福音。だからそんなものを受け入れてはいけない。そしてそのような教えを持ち込む者、説く者は、のろわれるべきだと。

モルモン教の開祖であるジョセフ・スミスという人は、14 歳の時にイエス・キリストの幻を見てイエス・キリストから直接啓示を受けた、と主張します。でも、彼の言うイエス・キリストは、聖書のイエス・キリストではなくて、神によって造られたルシファーのお兄さんとしてのイエス・キリストであります。ですから御使いの訪問を受けたということ。御使いの啓示を受けたということ。そして 17 歳の時には、モロナイというまた別の御使いの訪問を受けました。天使モ

ロナイというのが、モルモン教の経典『モルモン書』の中に出てきます。『モルモン書』の元となる古代エジプト語で書かれたアメリカインディアンの歴史を刻んだ金の板、金板というものが隠されている場所をこの天使モロナイが示すわけです。それはヘブル語と同等だと言っていますけれども、そしてそのモロナイの啓示を受けてジョセフ・スミスは、その金の板を発見して、それを元に『モルモン書』というものを書いたわけです。その『モルモン書』の元となったものを編纂したのが預言者モロナイという人です。天使のモロナイと預言者モロナイ、それぞれ別々ですけれども、その『モルモン書』を編纂したとされる預言者、古代アメリカ大陸に住んでいたインディアンの預言者です。彼らの主張によれば、AD400年頃に『モルモン書』というものは出来た、と言っていますけれども、全く荒唐無稽な話であります。そして、彼らは勿論聖書も使います。**イザヤ 29 章**、そこに『封じられた書物』という言葉が出て来るんですが、それこそモロナイが啓示した『モルモン書』である、と言います。また**エゼキエル 37 章**に出て来る『**2本の杖**』その2本の杖の1本は聖書・福音であって、もう一つは『モルモン書』である。ですから片手には『聖書』、片手には『モルモン書』というのが、モルモン教のスローガンであります。モルモン教では天使の啓示を受けて『**ほかの福音**』をベースにしたグループを形成しているわけです。でもそれこそ、のろわれるべきだとパウロは言っているわけです。イエス・キリストを信じると、自分たちこそは、ボーン・アゲイン・クリスチャンだと、モルモン教徒たちはそう主張します。でも、彼らの言うイエスはルシファーの兄であって、御使いであります。天父と呼ばれるエロヒームが生み出したエホバ。旧約聖書に出てくるエホバとは、そのルシファーの兄イエスであると。そのエホバというイエスが万物を創造したと、モルモン教では言います。

エホバの証人では、やはり「イエスを信じる。」と言いますが、イエスは御使いのミカエルが受肉したものである。エホバが造った最高の被造物こそがミカエル。そして、それが人となったイエスということです。ですから、エホバの証人も天使の、御使いの啓示を受けた宗教です。そして、それはパウロたちが宣べ伝えた福音に反するものですから、当然のろわれるべきもの。そしてそのような教えを説いたチャールズ・ラッセルという人もろわれるべき人だと。勿論悔い改めさえすれば良いわけですが、それがなければ勿論のろわれるということです。それは避けられない裁きということです。

統一教会も開祖である文鮮明が16歳の時にイエス・キリストと出会って、イエスから「自分が果たせなかった救いの働きを完全に全うしてもらいたい。神の目的を完全に果たしてもらいたいから、お願いします。」とお願いされて、文鮮明は再臨のメシアとして救いの完成を自らの任務として統一教会というものを起こしていくわけですが、そのイエス・キリストも統一教会では神ではありません。バプテスマのヨハネのお父さんの祭司ザカリヤとマリヤとの間に生まれた者、不倫の子どもであると言っています。そして、文鮮明こそが真のメシアということです。この場合は御使いということではありませんけれども、しかし完全に聖書から逸脱した教えですから、これはパウロたちが宣べ伝えた福音に反するもの。これもやほりのろわれるべきものであります。

ちなみに一応プロテスタントに所属するようになっているセブンスデー・アドベンチスト教会というグループがあります。セブンスデーというのは、7つの日、7番目の日ということです。アドベンチストというのは、待ち望む。これは特に再臨を待ち望むという意味ですけれども。セブンスデーというのは7日目、すなわち土曜日の安息日を守る人たち。日曜日に礼拝する教会は、これは獣の刻印を受けて救われない人たちと。完全に墮落した世俗化した人たち。そういう人たちは日曜日に集まって教会で礼拝をする。ですからセブンスデー・アドベンチストのグループに属さなければ救われない、というのが本来の教えであります。元々このセブンスデー・アドベンチストの事の起こり、創始者というのはウィリアム・ミラーという人ですが、ウィリアム・ミラーという人が1843年にイエス・キリストが再臨されるということを予言したんですが、その年にはイエスは予言通り再臨しなかったわけです。そして次の年もイエスが再臨するとウィリアム・ミラーは宣言したんですが、結局イエスは再臨しなかったのです。そこで分裂も起きました。でもその中でエレンジ・ホワイトという女性の方が「イエスが再臨出来なかったのは、私たちが安息日に、7日目の土曜日に礼拝を守っていなかったからだ。だからイエスは戻って来られなかった。」ということで、このエレンジ・ホワイトという人がセブンスデー・アドベンチストのほとんど基礎を作るわけです。土曜日に礼拝を捧げるという、それを律法化する

わけです。それを守らない者は救われぬ、と説くようになったわけです。実際にこのセブンスデー・アドベンチストが説いていることは、特にエレンジ・ホワイトという人が説いていることなんですけれども、「イエス・キリストはミカエルである。受肉前のキリストはミカエルである。」と説いています。そして「地獄は存在しない。靈魂は消滅するだけで地獄は存在しない。」この教えを非常に喜んだのが、エホバの証人です。ですからエホバの証人はこのセブンスデー・アドベンチストから派生したと言っても差し支えないわけです。そして、この教えは部分的には聖公会の中にも見られます。聖公会も「地獄はない。」と説いています。このセブンスデー・アドベンチストの中で特にエレンジ・ホワイトの教えを厳格に守る人たちは今日もいますし、そのホワイトの教え、それは神からの預言であって神の靈感された聖書と同等の権威があると、やはり聖書プラスアルファということで多くの者たちは律法主義に陥っています。セブンスデー・アドベンチストも非常に律法主義的であります。

ただし、注意して頂きたいのは、セブンスデー・アドベンチストのクリスチャンたちが全員このエレンジ・ホワイトの教えに忠実だというわけではありません。中には日曜日にも礼拝をする人たちもありますし、エレンジ・ホワイトに厳格でない人たちもいます。より福音的な人たちもおりますから、非常に大きなグループですから誤解しないで下さい。ケログというシリアル食品もセブンスデー・アドベンチストから来ていますけれども、いろんな大きなグループとして一括りには出来ないということも知って頂きたいと思います。同様にローマ・カトリックもやはり皆が皆、反聖書的、反キリスト的であるわけではありません。ローマ・カトリックの中にもイエス・キリストを唯一の救い主として信じて、所謂私たちと同じような福音的な信仰を持っている人たち、ボーン・アゲイン・カトリックという人たちも存在しますので、「カトリックは皆異端だ。もうこれからは付き合いはいけぬ。」とか、そんなふうに思わないで下さい。同様にセブンスデー・アドベンチストの教会の人たちも、そのように裁かないで頂きたいと思います。でもそれが実態でありますし、現実でありますので、しっかりと目を向けて頂いて、危険な教えからは遠ざかって頂きたいと思っておりますし、そのような教えに影響を受けている者たちがあるならば、是非正しく伝えて頂きたいと思っております。

ちなみにローマ・カトリックでは天使について9つの階級があると。これはユダヤ教から影響を受けています。ユダヤ教では7大天使というのが存在します。聖書の中に沢山の天使が出て来ますけれども、名前が出ているのはミカエルとガブリエルだけです。ミカエルという名前は、旧約にも新約にも出て来ます。カブリエルという名前もやはり旧約にも新約にも出て来ますが、他の天使の名前は出て来ません。セラフィムとかケルビムといった御使いの位が存在することは分かっています。強いて言うならばルシファー、暁の子、明けの明星、と呼ばれる後にサタンとなるもの以外は、特別具体名が出ておりません。でもユダヤ教では、そのミカエルとガブリエルの他にラファエル、ウリエル(4大天使とも言います。)そこにプラス3。そして、ローマ・カトリックはさらに2人加えて9人の御使いがいると。

そして、そのような天使の教えに影響を受けたのがイスラム教でもあります。イスラム教は聖書も使いますが、聖書プラス、コーラン若しくはクルアーンというもの、他にもいろんな伝承がイスラム教には存在します。聖書と同等、若しくは聖書以上に重んじているわけです。

そして、これは番外編でありますけれどもイスラムの開祖であるムハンマドもやはり40歳の時に洞窟で瞑想していたところ天使の訪問を受けました。他の異端と同じです。ジブリールという御使い、アラビア語でジブリールは、ガブリエルのことです。そこで啓示を受けてコーラン、すなわちクルアーンの啓示を受けたわけです。文盲だったのでムハンマドはそれを文字にすることが出来なかったと言われております。最初はそれが御使いからのものとは思えずに、ジンと呼ばれる魔人、悪魔悪霊のようなものからの啓示だと思ってしばらく悩んでいたのですけれども、後にそれを神からのもの、アラーからのものとして、それを文書化してクルアーンとしたわけです。自分が書けなかったので他の人に書かせたわけです。そして、そのクルアーンの中にはジブリールの他に、ガブリエルと呼ばれる御使いだけではなくて、ミカイル(これはミカエルのことです。)、またイズライールとか、イスライルとか。4大天使というのが存在します。これもユダヤ教、カトリックといったところから採られております。プロテスタントは、ミカエルとガブリエル、若しくはルシファーを例外として認めるぐらいで、他に天使の名前を挙げるということは致しません。

ここで**第二コリント 11:14~15**を開いて頂きたいと思っております。『<sup>14</sup>しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御

使いに変装するのです。<sup>15</sup> ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。『サタンは光の御使イルシファーであったわけです。文字通り“明けの明星”暁の子ですから、まさに光の御使いだっただけです。でもそのルシファーが墮落して、サタン。そしてそのサタンに付き従った御使いたちが悪霊となって、地に落とされたわけであります。そのサタンの手下どもが義のしもべに変装する。“しもべ”という言葉は、英語の聖書では「ミニスター」"minister"とも訳されます。「ミニスター」と言えば聖職者のことです。カトリックの用語で聖職者。プロテスタントでは教役者と言います。そのことを牧師、先生と言うわけですが。ですから偽牧師、偽宣教師、偽伝道師。サタンの手下共が変装しているケースがあるということです。彼らが説く『ほかの福音』に注意して頂きたいと思います。キリスト教会以外にも天使占いなんていうものもあちこちでもはやされておりまして。オカルトの世界です。天使がもたらすものだからといって、何でも鵜呑みにしてはいけな、歓迎してはいけな。悪魔も悪霊も天使であるということを忘れてはなりません。ですから、「うちのエンジェルがこう言ったんです。」とか、「私のエンジェルがこう言ったんです。」なんて言っても鵜呑みにしてはいけません。エンジェルというのは勿論天使のことですけれども。英語圏ではよく妻のことをエンジェルとか言ったりするんですけれども。私たちは人間の言うことを注意して鵜呑みにしないで吟味する必要があるということです。“御使い”という言葉はギリシャ語では、「アγγελος」"aggelos"と言います。「アγγελος」というのがエンジェルの語源です。単純に「アγγελος」というのは、「遣わされた者、メッセンジャー」です。ですから、メッセンジャーの言うことだからと言って鵜呑みにしてはいけな。

テキストに戻って頂くと 9 節に『私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。』御使いであろうと、誰かであろうと。誰であろうと、牧師であろうと、伝道者であろうと、宣教師であろうと、神学者であろうと、聖書学者であろうと、有名なベストセラー作家であろうと、お世話になった人であろうと、誰だろうと、非聖書的な教説を説く者、パウロたちが説いた福音に反することを説く者は、のろわれるべきだと、パウロは言いました。ガラテヤ 2:4 を見ていただく『実は、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあったのです。彼らは私たちが奴隷に引き落とそうとして(行いをしなければ救われな、)、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。』と。彼らは偽兄弟。兄弟というのはクリスチャンのことですから、偽クリスチャンだと言っています。『ほかの福音』を説く者、キリストの福音を変えてしまう者、パウロたちが宣べ伝えた福音に反することを説く者、皆同じですが、彼らは律法主義者であり、ユダヤ教主義者であり、割礼派と呼ばれる人たちであり、かき乱す者たちであり、彼らまた偽兄弟、偽クリスチャンだと言っています。牧師の中にも、クリスチャンでない者たちがおります。正統派の教会の中にもクリスチャンでない者たちがおります。ローマカトリック教会にも、プロテスタントにもおります。ギリシャ正教会にも、ロシア正教会にも偽クリスチャンたちがおります。注意して下さい。自分たちの教会は大丈夫、だと思ったら大間違いです。この教会にも偽クリスチャンがいるかもしれません。注意して下さい。今いなくても、来るかもしれません。でも、その者はのろわれるべきだ、と言われております。“のろわれるべき”という言葉に\*印が付いております。欄外を見ていただくギリシャ語で「アナテマ」とあります。元々は「生贄を捧げるためにとっておかれるもの。」ただ屠られるのを待っている生贄の動物のことを指します。つまり、屠られること、屠殺される、殺されることはもう免れな。完全に滅ぼされるものという言葉で、「聖絶する」という言葉も訳語としてあります。よく旧約聖書の中で、イスラエルの民が約束の地の原住民を聖絶する。男も女も子供も家畜も全部皆殺しにする、という時に「聖絶」という言葉を使っていますが、それはギリシャ語では「アナテマ」であります。この言葉を「神の怒りに渡されよ。」というふうに訳したり、「神にのろわれるままにさせよ。」というふうに訳す場合もあります。

第一コリント 16:22 にも使われています。『主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。(アナテマ。)主よ、来てください。(マラナサ。)]「アナテマ、マラナサ」と言われているところです。対照的です。主を愛さない者はだれでも、アナテマ。主を愛する者とは、「主よ、来てください。」と言う、「マラナサ」と言う人たちです。マラナサ・グレース・フェロシップに属しているからといって、全員が全員、主を愛しているわけではありません。私を愛していない者は、のろわ

れよ。「マラナサ。主よ、来てください。」と口では言っている、主を愛していないならば、「アナテマ」と言われてますから、他人事と思わないで頂きたいと思います。皆さんを脅しているわけではありません。でも、まさに『ほかの福音』を教会内に持ち込む者たちというのは、主を愛していない者たち。主を愛していない者たちは、『ほかの福音』を持ってくる者たちと何ら変わらない。主を愛していないならば、文鮮明と何ら変わらない。主を愛していないならば、ジョセフ・スミス、チャールズ・ラッセル、そういう人たちと何ら変わらないということです。

この「アナテマ」という言葉は、教会史においては 4 世紀、教会の会議でニカイア会議というのがあって、ニカイア信条というものが採択されて、そこで異端視された者を「アナテマ」と言うようになりました。三位一体の神が聖書の神である。それ以外の教えを説く者は、これは異端であると。その者は「アナテマ」と。それがカトリックの中では“破門”を表す言葉として使われるようになりました。カトリックでは、「洗礼を受けるか受けないかは自由である。すなわち洗礼は救いのために必要でない。」と言う者は「アナテマ」される、と説いています。「排斥」というふうにも訳されます。「洗礼を受けるか受けないかは自由だ。すなわち洗礼は救いのためには必要ないのではないか。」なんて言う人たちは「アナテマ」「排斥」「破門」というふうにかトリックは言います。勿論パウロに言わせれば、それが「アナテマ」だと言うわけです。洗礼を受けなければ救われない。割礼を受けなければ救われない。神の恵みを全く踏みこむ者たちは、「アナテマ」。実際にイエス・キリストは隣の強盗に対して、「あなたは今日私と共にパラダイスにいます。」とルカの福音書 23 章でイエスはどのように救いの宣言をなされました。隣の磔<sup>はりつけ</sup>になった状態で、十字架上の四人がどうやって洗礼を受けることが出来るでしょうか。洗礼を受けなければ救われないと言うならば、「あなたは今日私と共にパラダイスにいます。」などと、とてもイエスは言えないわけです。カトリックは、洗礼を受けなければ救われない、と言います。洗礼を受けなければ救われない、と言う者はアナテマだ。イエス・キリストの十字架の技すら、それは完全に否定する教えですから、パウロに言わせればそれこそアナテマであると。厳しい言葉です。何故ここまで厳しいか。それはイエス・キリストの十字架を無駄にしてしまう教えだからです。イエス・キリストの十字架の死を犬死にとするような教えだからです。滅びをもたらす異端の教えだからです。だからパウロは怒っているのです。アナテマ、のろまれるべきだ。そのような者は滅ぼされるべきだ。異端の特徴、それは聖書プラスアルファ、信仰プラスアルファ、恵みプラスアルファ。信仰義認ではなくて行為義認。聖書と同等の権威を教祖が持っているとか、教祖の記した経典が聖書以上に重要視されるとか。それらはすべて異端であります。それらはすべて、のろまれるべきであります。それらはすべてアナテマと呼ばれるものです。私たちの教会の中も、教会の外も是非見回して頂きたいと思えます。すべてのことを聖書をもって吟味して頂きたいと思えます。今この教会の中で起こっていること、または教会の外で起こっていること、世界的にもはやされているいろいろなクリスチャンたちの運動・ムーブメント。それらは聖書に即しているだろうか。そのベストセラー本に書かれていることは、聖書的だろうか。その有名な先生が教えているその教理は、聖書と合致しているだろうか。そのセンセーショナルないろいろな奇跡や癒しや超自然現象が起こっているその運動は、その現象は、聖書で説明されるものだろうか。そういうことを皆さんに考えて頂きたいと思えます。

**使徒の働き 17:11** は皆さんにとってはお馴染みの聖句となっていると思えます。非常に重要な聖句です。『このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。』これが良いクリスチャンのやるべきことです、姿勢です。非常に熱心にみことばを聞くだけでは、良いとは言えません。そうではなくて、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べる。これが良いクリスチャンのしるしです。パウロのメッセージですら、新約聖書の大半を書いたパウロ。旧約聖書のエキスパート。歩く聖書というような、博士のパウロのメッセージを、ベレヤのクリスチャンたちは自分たちで聖書と照らし合わせながら吟味したと言っているわけです。その人たちのやったことをパウロは評価して、ベレヤのクリスチャンたちは良い人たち。なぜならば、彼らは非常に熱心に御言葉を聞くだけではなくて、私のメッセージを聖書と照らし合わせながら検証して、果たして聖書的かどうかしっかり吟味して、その上で自分のものとして取り込んだ。鵜呑みにしなかった。素晴らしいクリスチャンだと、褒めているわけです。それが聖句が掲げられている働きであろうと、それが聖霊が豊かに望

んでいる働きと言われているものであろうと、ことごとく私たちは聖書をもって吟味しなければいけません。鵜呑みにしてはいけません。いろんな現象が起こっているからといって、「人がそこで救われています。奇跡が起こっています。不治の病が癒されています。歩けなかった人が歩けるようになりました。」そういうものを見たところで私たちはその現象、その体験だけで物事を判断してはいけません。それが神聖なものかどうか、それが神の働きかどうかは、すべて御言葉によって判断されるということをしかりと習慣づけて頂きたいと思います。

聖霊の働きかどうか、神の働きかどうか。聖霊によって倒される。聖霊の器と呼ばれる有名な伝道者が手をかざすだけで、会衆がバツバツと後さまに倒れていく。聖書的でしょうか。確かに聖書には人が倒れるシーンがあります。イエスの敵は皆後さまにバツバツと倒れています。でも、クリスチャンたちはイエスの前にひれ伏して倒れるわけです。後さまに倒れるとは、イエスの敵たち。イエスを逮捕に来た神殿警察、ローマ兵士たちは、後ろに倒れました。ヨハネの福音書18章に出てきます。ですから、聖霊によって後さまに倒れる。そして、後さまに倒れて打ち所が悪くて死んでしまった人がおります。ですから、それ以来そのような聖霊によって倒される集会では必ず後ろに補助者がいまして、頭を打って怪我をしなくても良いように、そういう人たちがいないと聖霊は守れないので、人間の手を借りなければ聖霊は働くことが出来ないのです。何と不可思議な、何とおかしな矛盾するような働きかと思えますけれども、他にも救われた者には必ずそのしるしとして異言が伴うとか、「聖霊のバプテスマには必ず異言が伴う。異言がなければ救われていない。異言がなければ聖霊のバプテスマを受けていない。異言で祈る祈りは最も効果的で、異言で祈る祈りには必ず神が応える。異言で祈れば人は癒される。」とんでもありません。それも非聖書的です。

また、預言というものもはやされます。「個人預言をしましょう。」あなたの運命を占ってあげましょう、と全く聞こえは同じです。最近では預言者カフェなるものが東京にあります。預言者カフェに行くと、占いの館みたいにして預言をしてもらえるわけです。預言者学校なるものもあります。「預言者を養成しましょう。」異言もそうです。「異言も訓練によって身に付くもの。」預言も異言も聖霊の賜物として確かに聖書の中には列記されています。そして私はそれらの存在、そしてそれらの働きは今日も有効であることを認めておりますけれども、ただしそれは聖書の枠内においての話です。異言は人の徳を高めますが、それは個人の徳を高めるため、預言は教会の徳を高める。ですから個人預言なんていうものは、全く聖書的ではない。むしろ矛盾しているわけです。個人預言じゃなくて、それは教会の徳を高めるために成されるものですから。異言も神をほめたたえるために。病気を治すためではありません。自分の祈りを聞いてもらうためではないのです。言葉に表せないその感謝な思い、喜びの思いを爆発させる時に言葉がなくて困る。そういう時に異言の賜物が与えられて、もう疲れも忘れて自分の口から天使の言葉なる異言が出てくるわけです。それは素晴らしい体験だと思いますし、預言も教会の徳を高める、建設的な働きをする素晴らしいものです。時には人の秘密が明らかにされたりもするわけです。

癒しというのも聖霊の働きとして成されることもありますけれども、イエス・キリストが病人を癒された時、必ず人々は神を崇めました。イエス・キリストを崇めることはしなかったのです。つまり、必ず癒しの栄光は神にのみ帰せられて、人には帰せられないということです。「その預言者が、その伝道者が、その働き人、その聖霊の器が素晴らしい。その人が聖所の真ん中に立ってスポットライトを浴びる。」なんていうことはなかったのです。イエス・キリストはその生涯において1度たりとも癒しの集会なんか開かなかったのです。癒しもなさいましたけれども、必ずイエス・キリストは教えを説いたわけです。ですから、御言葉が全く教えられないとか、御言葉が使われてもそれらは文脈から全く外れた形で後付けされるようなもの。これは問題であります。

霊の戦いという分野も確かに聖書にはありますけれども、ただ「すべては悪霊の支配によるものなので悪霊を追い出さなければ福音宣教は進まない。」とか。「その地域には特定の悪霊がいるので、その特定の悪霊をまずは特定しなければ。霊的な地図作りをしましょう。この町には姦淫の霊が巢食っている。権藤は姦淫の霊によって完全に侵されてしまっている。だからまずは姦淫の霊を特定して、その霊を追い出すための悪霊追い出しの祈りから始めましょう。善光寺の周りにキリストの血潮をまいて、そして善光寺を清めなければこの町は救われぬ。」そういうことを説

くわけです。聖書にはそんなことは1つも書いてありません。一昔前に流行った『笑いのリバイバル』トロント・ドレッシングというものもありました。ゲラゲラ笑うわけです。犬のように吠えたり、ライオンのように吠えたり、床中ごろごろ転がってみせたり。ケラケラ笑いながら、それで何かから解放される、癒される。これは聖霊の働きであると。そんな事は聖書には書いてありません。もしそれが聖霊の働きならば、聖書に書かれているはずで、なぜならば、聖霊が聖書を書いたからです。聖霊が聖書に反すること、矛盾することをするという事はありえないことです。聖霊が自ら、自らの書いた聖書に反することをする。聖霊が自己矛盾する。そんな事は絶対にあり得ないことです。すべて聖霊の働きであるならば、聖書の枠内で。そして聖霊はすべてイエス・キリストのものを受けて、イエス・キリストの栄光を現わすと言われておりますから、もしイエス・キリストがゲラゲラ笑いながら、床を転がり回りながら、犬のように吠えて、ライオンのように吠えて、大騒ぎしている姿を私たちが福音書の中に見るならば、その『笑いのリバイバル』は正当なもの、聖書的なものとして認められるかもしれません。でも、そんなイエスの姿を見ることは出来ません。あくまで彼らが使う聖書、それはその働きを正当化する、権威付けるものです。ですから『初めに聖書ありき』ではなくて、『初めに体験ありき』です。体験を持って聖書を解釈する。聖書を持って聖書を解釈するのではないのです。自分たちに都合の良いように、文脈から御言葉を取り除いて、そしてそれを後付けする、こじつけする、私的解釈する。それが異端のやることであります。

申命記 13:1~4 をお読みしたいと思います。『<sup>1</sup>あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、<sup>2</sup>あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言っても、「伝統的な正統派のキリスト教会では、もはや人は救われない。彼らの説くイエス・キリストは間違っている。イエス・キリストは神ではない。イエス・キリストは大天使ミカエル。」エホバの証人は言います。「イエス・キリストはルシファーのお兄さん。」モルモン教は言います。「イエス・キリストは祭司ザカリヤとマリヤとの間に生まれた不倫の子。」と統一教会は説きます。また諸々のグループでも、たとえそれがプロテスタントであろうと、福音派と呼ばれるグループであろうと、聖霊派と呼ばれるグループであろうと、エキュメニカル派と呼ばれるグループであろうと、いろんなことを彼らは説きます。)<sup>3</sup> その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。<sup>4</sup> あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。』言い換えれば、聖書の御言葉に従って、主に従わなければいけないということです。主の命令、主の御声に。これは他ならぬ神の言葉、聖書であります。体験を持って聖書を解釈してはいけません。聖書を持って聖書を解釈しなければいけません。いくら聖書を使っている、聖句を並べたてている、文脈を無視して後付けしたようなもの、こじつけしたようなものは、すべては非聖書的な異端的な教えだということを知って下さい。すべての現象は、聖書で説明されるものでなければなりません。すべてのムーブメント、すべての運動、すべてのリバイバルと呼ばれるもの、それは聖書で説明されるものでなければなりません。「それでは堅苦しい。聖書で人を縛るつもりか。聖霊はもっと自由なお方だ。」と、いろんなことを言います。そうではありません。

使徒の働き 2:16、聖霊が降った場面、ペンテコステの聖霊降臨の日のことを思い出して下さい。ある人たちはその現象を見て、朝の9時でしたから、「朝っぱらから酔っ払っているのではないか。」と思った者もあったわけです。この不可思議な現象に人々は驚き惑っていたということが、そこに記されています。激しい風が吹いて、響きが起こって、家全体が地震のように揺れたわけです。皆が皆聖霊で満たされて、御霊が話させて下さるように。習ったこともない多国語で、外国語で神を崇める言葉をどンドン人々が、ユダヤ人のクリスチャンたちが、初代教会の人たちが語り始めたので、人々はもうこれをどう受け止めたらいいのか、一体これはどういう意味なのか、何の現象なのか、分からなかったわけです。それに対して使徒の働き 2:16 を見て頂くと『これは、預言者ヨエルによって語られた事です。』と。ペテロが「これは聖書に書かれていることです。聖書でこのように説明されていることです。このように聖書によって裏付けされることです。」と。聖霊の働きはすべて聖書によって裏付け出来るんです。すべて聖書によ

て説明出来るものでなければ、それは聖霊の働きではない。それは神の働きではないということを知って下さい。このマラナサ・グレイス・フェロシップで行われていることはすべて聖書によって説明されなければ、それはもはや神の働き、動きではないということです。そして、それに気付いたならば、速やかにそれをストップして改めるべきだということです。勿論間違ふことも私たちにはありますから、注意をしながら、常に聖書で吟味するということです。ですから異端の教え、非聖書的な教え、それを吟味するのはそんなに実は難しいことではありません。

第一ヨハネ 4:1~3 にもこう書いてあります。『**愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。**<sup>2</sup> 人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。<sup>3</sup> イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。』霊だからといって、何でもかんでも信じてはいけない、鵜呑みにしてはいけないと。

第一コリント 12:10 (『ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。』) というところには、そこには御霊の賜物のリストがあって、異言や預言の賜物も挙げられていますけれども、もう一つは霊を見分ける賜物。霊的識別力の賜物というものもあります。すべての牧師は霊を見分ける賜物を神から与えられていると私は信じております。

エペソ 2:20 も参照して頂きたいと思います。『あなたがたは(エペソのクリスチャンたちは)**使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。**』『**使徒と預言者という土台**』というのは新約聖書ということです。新約聖書は、使徒たちと預言者たちによって伝えられた書物です。彼らが神の靈感を受けて書いたものが新約聖書であります。ですから、すべては新約聖書によって教会というものは成り立っているということです。教会の働きはすべて新約聖書によって説明されるものでなければならぬということです。もしこれを土台としていないならば、それはもはや教会の働きではない。神の働きではない。キリストの体としての働きではないということです。ですからそれほど識別する、判別する、吟味する、試すということは、難しいことではありません。

簡単に言うと 3 つのポイントを皆さんに、今話したことを総合してまとめたいと思いますが、1 つはそれが本当に聖書の中に書かれている神聖な神の働きかどうか、聖霊の働きかどうか。それを吟味する。第一ポイントとしてそれは、イエス・キリストの生涯に見られるものかどうか。つまり福音書の中に書かれているイエス・キリストが、それと同じことをしているならば、それは間違いなく神の働き、聖霊の働きということになります。

第二ポイントは、その働きは『**使徒の働き**』に継承されているかどうか。イエス・キリストの生涯に見られたならば、福音書に見られたならば、それは間違いなくキリストの使徒たちである十二使徒たちに継承されて、それは『**使徒の働き**』の中に、初代教会の中に引き継がれているもの、受け継がれているものだということが分かります。ですから『**使徒の働き**』の中に出てくるような働き、運動、現象、現れ、と同じならば、それが正しいと言えるでしょう。

そして 3 つ目は、さらにそれが発展して『**パウロなどの書簡**』パウロだけではなくペテロとかヨハネとか**ユダの手紙**もありますから、その主に**パウロの書簡**の中で教理として教えられているかどうか。

この 3 つの関門をパスしたならば、それは間違いなく 100% 確信を持って、神の働き、聖霊の働きであるというお墨付きをもらうことが出来ます。それは福音書の中に、イエス・キリストの生涯の中に見られるかどうか。それは**使徒の働き**の中で、使徒たちによって継承されているかどうか。そしてそれは**パウロの書簡**の中で教理として教えられているかどうか。この 3 つを吟味する上でのポイントとして、識別するためのポイントとして挙げるならば、誰でも識別出来ます。**霊だからといって、みな信じてはいけません。**これらを直感的に、瞬時に知ることが出来るのが、霊を見分ける力というものです。1 発で胡散臭いと思うわけです。

他にもクリスチャンならば全員聖霊が与えられていますから、聖霊があなたの教師として異端を見分ける力も与えて下さい。ですから私たちは誰からも教えられる必要はないんです。実は今前半でお話したこと、エホバの証人、モルモン教、統一教会、またローマ・カトリックのいろいろな実態。それらをあなたが知らなくても、聖霊によって

すぐに教えられると。偽物を研究しなくても、聖霊が本物を教えてくれるので、あなたには分かります。「では、今までの話は一体何だったんですか。知らなくても良かったのであれば、時間の無駄ではないですか。」と思うかもしれませんが、でも聖霊は牧師を通して語りますので、聖霊があなたに必要な情報、必要な教え、必要な実態。それらも全部教えて下さいますから、私たちは聖霊からちゃんと必要なことを教えられるというのを信じて、怯える必要はありません。「騙されるんじゃないか。この異端のグループに取り込まれるのではないか。影響を受けてしまうのではないか。」心配する必要はありません。あなたが主のものならば、主はご自身のものを守られます。ただし、警告が与えられていることもちゃんと受け止めて欲しいと思います。ガラテヤ人のようにコロコロと豹変してはいけません。「あの人がああ言っていた。あの人がこう言っていた。」そんなことにいちいち靡なびいてはいけません。「インターネットでこういうふう書いてありました。この本にこういうふう書いてありました。このメッセンジャーがこんなことを言っていました。この先生が、あの先生がこう言っていました。」とか、そういうことに惑わされてはいけません。すべては聖書によって吟味しなければいけません。

テキストに戻って頂いてガラテヤ 1:10。『いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。』人に取り入ろう、人の歓心を買おうと努める。人を喜ばせようと語る。耳障りの良いことばかりを言おうとする。これはもはやキリストのしもべとは言えないと、言っているわけです。人を喜ばせようとして、人に取り入ろうとして、人の歓心を買おうと努めるならば、教会はいくらでも大きくなります。このマラナサ・グレイス・フェロシップもメガチャーチの仲間入りを果たすと思います。罪なんか一切口にしません。地獄なんか無い。「恵みによって救われるというのは難解なんです。何もなくて良い、そんな虫のいい話はない。ただほど怖いものはない。救いは無料で受けられる、信じるだけで救われる。それはちょっと胡散臭いし怪しい。でもこれさえすれば救われる、あれさえすれば救われる。そちらの方が分かりやすいし、それならできそうだ。」実は信仰義認の教理よりも、行為義認の教理の方が人間にとっては分かりやすいですし、人間にとっては身近で馴染みやすく、そして魅力的なんです。自分の努力が報われる。努力次第でいくらでも御利益がある。その教えの方が分かりやすく、有り難いのです。キリスト教のように“恵み”だとか言われても、ピンとこないわけです。何もなくても救われるとか、全部神様がして下さるとか、委ねれば良い、信じれば良い、信頼するだけでいい。多くの人たちにとってはそれは謎めいているわけです。未知の世界です。ですから、人に取り入ろうとか、人の歓心を買おう、人を喜ばせよう、耳障りの良いメッセージをする。その方が分かりやすいですし、その方が沢山の人を獲得出来るということです。でもそれがまさにカルト、異端の教えであります。

そして 11 節 12 節に目を留めて下さい。『<sup>11</sup> 兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。<sup>12</sup> 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。』キリスト教の教えは、人間によるものではない。だから信仰義認なんです。人間によるものはすべて行為義認です。その方が人間には分かりやすいですし、人間の理解の中に収まるわけです。でも“恵み”は人間の理解を超えるわけです。「どうして信じるだけで救われるのか。何もしないのに。分不相応な者がどうして過分な親切を受けることが出来るのか。そんなことあってはならないし、あり得ないことだ。」と。でもキリスト教はそれを「あってはならないことだし、あり得ないことだけれども、でも有り難いこと。こんな私を神様が愛して下さる。有り難い。あり得ないけど有り難い。」これが恵みです。でも人間は「あり得ない。」で終わるわけです。「あり得ないから信じない。ただほど怖いものはない。ひも付きじゃないか。自分の理解を超えたことはどうも受け付けられない。怖いのです。未知なんです。もっと分かりやすい方がいい。自分にもできそうなものがある。」それが行為義認、それがキリスト教以外のすべての宗教です。キリスト教系の異端だけではなく、ローマ・カトリックだけではなく、ギリシャ正教だけではなく、すべての宗教は必ず行為義認です。人の行ないが必ず必要です。仏教もそうです。イスラム教もそうです。ヒンズー教もそうです。キリスト教以外にはすべて行ないが含まれます。浄土真宗でもそうです。「南無阿弥陀仏」と唱えているだけでは駄目なのです。『信じるだけで救われる。』と説いて

いるのはキリスト教だけです。『恵みのみで救われる。』と説いているのは、キリスト教だけです。他は皆人間による宗教。人造宗教です。人間による福音、人間による良い知らせ、人間によるゴスペル。そういうものがいっぱい溢れます。そして教会の中にも、それらが今入り込んできているということも知って下さい。キリスト教系の異端は元より、自由主義神学というものもそうです。リベラルと呼ばれるもの。聖書はすべて神の靈感による言葉ではない、というものです。「それは神の靈感というよりも、人間の靈感によって書かれた人間の創作である。それが聖書という書物。だからそれらを学問的に文学的に歴史的に学ぶべきであって、神の言葉として信じるようなものではない。絶対的な最終権威とすべきものではない。決めるのは全て人間である。人間が判断すればいい。最終権威は聖書ではなくて、神ではなくて、人間である。それは人間による福音です。他にも心理学、精神分析学が教会の中に入り込んできています。耳障りの良い教えがあります。「問題は罪じゃない。問題はあなたが幼少期に受けた傷である。お腹の中にいた時に受けた傷が、大人になったあなたにこのような問題を引き起こしている。罪がやめられないのは、その依存症は、その悪習慣はすべて幼少期の傷が原因である。」とか、いろんなことを、耳障りの良いことを、神を除いたいろいろな科学・哲学・学問はキリスト教化されて、福音化されて、またいろいろなスピリチャリティと呼ばれる霊的現象、オカルト現象、ニューエイジ。「何でも信じればいい。自分も信じればいい。誰でも神になれる。」そういった教えもすべて人間による福音として、キリスト教用語がそこに混ぜ合わせられながら、また文脈から外された聖句がそこに使用されながら、教会の中に入り込んできているということを知って、一つ一つ吟味して頂きたいと思います。たとえそれらが世界的流行であったとしてもです。ベストセラーとして多くの教会で受け入れられたものだとしてもです。

13 節 14 節に『<sup>13</sup> 以前ユダヤ教徒であったころの私の行動は、あなたがたがすでに聞いているところです。私は激しく神の教会を迫害し、これを滅ぼそうとしました。<sup>14</sup> また私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。』ここにパウロの回心物語が記されております。元々はサウロと呼ばれていました。サウロというのは、イスラエルの初代王と同じ名前です。サウルというのとサウロというのは同じです。“求められた者”というのがその意味です。そのサウロからパウロに改名していますが、パウロというのは“小さい者”です。“求められた者”から“小さい者”に。ユダヤ教を負って立つ者としてサウロは求められたわけです。当時のユダヤ教の最高峰であるガマリエルという人に師事して、そのガマリエルはユダヤ教の歴史の中に十指の指に入るような最高のラビ。ラバンと呼ばれる数少ない称号を持った教授でありました。神学者でありました。霊的リーダーでありました。そのガマリエルをして「もはやサウロには教える書物がない。」と言わしめたほどサウロは、ガマリエル以上の存在になる“求められた者”だったわけです。でも、その彼がダマスコの途上、大祭司の権限を受けて、男も女もイエス・キリストを信じる者を全部縛り上げては暴行し弾圧し、撲滅しよう、処刑しようとする迫害に燃えていたそのサウロが、復活のキリストに出会ってしまうわけです。目からウロコの回心劇、それが**使徒の働き 9 章**に詳しく記されております。目からウロコという言葉は勿論そのパウロの回心劇から今日日本語にもなった言葉となっております。全く別人に変わってしまうわけです。人生が 180 度変わるといふ。それが目からウロコということです。そして、そのパウロはユダヤ人の中のユダヤ人であるということです。ユダヤ教主義者が異端的な教えを持ち込んではいけるけれども、我こそはユダヤ教主義者のまさに急先鋒であった。その熱心さは教会を迫害するほどであったと。

ピリピ 3:5~6 にもそのことが触れられております。『<sup>5</sup> 私は八日目の割礼を受け(ユダヤ人の男の子ならば生後 8 日目に割礼を必ず受けます。)、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。(ベニヤミンの王こそが、あのサウルです。イスラエルの初代王です。)きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、<sup>6</sup> その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。』ユダヤ教主義者、彼らは自らの律法による義というのを誇りにしていたわけです。「割礼を受けなければ救われない。」行為義認を説いていたわけです。でも、パウロ以上に彼らは厳格だったわけではありません。パウロ以上に優秀だったわけではありません。パウロこそ超エリートです。サンヘドリンの議員すら勤めていた、全イスラエルにおいて 70 人の中に彼は含まれていた

わけです。+1 大祭司がいて全部で 71 人ですが、サンヘドリンの議員と言ったら全イスラエルから大祭司を除いて 70 人しか選ばれない。その中の 1 人だった人物です。それがパウロという人です。そのパウロ、彼は先祖の伝承も重んじていたわけです。彼の行動を見ていれば、ライフスタイルを見ていれば分かります。彼ほど律法を重んじ、ユダヤ教の発展を願った者はなかった。そしてキリスト教徒ほどユダヤ教の発展を阻む脅威はなかったということで、キリスト教の撲滅運動に彼は加わって、激しく(激しくという言葉は、文字通りは「計り切れないほど」)物凄い迫害をしていたということが分かります。

テキストに戻って頂いて **15 節 16 節**。『<sup>15</sup>けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が、<sup>16</sup> 異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、』ここで止めておきます。ユダヤ人の中のユダヤ人でありながら、パウロは復活のキリストに出会って回心して、目からウロコで、全くこれまでとは違う方向に導かれて行きます。ユダヤ人に対してではなくて、異邦人に対してキリストの福音を宣べ伝える異邦人使徒として召されて行くわけです。そして、その召しというのは**使徒の働き 9 章**に出てくる回心の時ではなくて、さらに遡<sup>さかのぼ</sup>って、母の胎内にいる時から既に神によって選び分けられていたと。後からこのことをパウロは知ったと思います。回心直後にもイエスの言葉によってパウロは異邦人に召されて行くということが召命として与えられておりました。異邦人宣教のミッションがもう既に回心直後に与えられていたんですけれども、でも実のところはパウロがまだ生まれる前から、お母さんのお腹の中にいた時から、もうこのことは神によって定められていたんだと。後で知ったということです。こういうことが実際にあるということも私たちは聖書から教えられております。例えばエサウとヤコブの双子の兄弟も、お母さんのリベカのお腹の中で既に神様から選び分けられていたということ。また、エレミヤという若い預言者も母の胎内にいる時から、もう預言者として召されていた。**エレミヤ 1:4~5** に書いてあります。「私はまだ若いです。」と言って辞退しようとしていたエレミヤに対して、神は「私は母の胎内にいる時からあなたをもう選び分けていた。」と。また**イザヤ 49:1** も後で参照してみてください。また**ルカ 1:15**、バプテスマのヨハネもそうです。そして私の牧師のチャック・スミスも生まれた時から牧師として召されていました。チャック・スミスのお母さんが、ちょうど 1927 年のことですけれども、自分のまだ幼い娘を抱いて、医者に見せても「もうダメだ。もうこの子は急病で亡くなってしまう。」その時に教会に駆け込んで行ったわけです。もう赤ちゃんは瀕死の状態。でも、その時にその教会の牧師はこう言ったそうです。「この問題から目を離し、イエス・キリストに祈りましょう。」そしてその時チャックの母はこう言ったそうです。「あなたが娘を取り戻して下さるならば、私はあなたに自分自身を明け渡します。そしてあなたにお生涯仕えます。」と。そして、その直後に瀕死の状態だった娘は、赤ちゃんの娘は癒されたわけです。そして、その 2 か月後にチャック・スミスがお腹に宿りました。そしてすぐにそのチャック・スミスは「神にお捧げします。」と約束した子として、チャックのお母さんはもう生まれた時からチャックを神に捧げて育てていきました。アルファベット教えるのも聖書からすべてアルファベットを教えたそうです。でもチャックはそのことはずっと知らずにいて、脳外科を目指して医科大学に進学することを願っていたのですけれども、でもある説きにチャックは主の召命を受けて、脳外科医になる夢を諦めて、牧師になるべく神学校に進んだわけです。でも、その話を後からお母さんから聞かされて、チャックは驚いたそうです。最初にそれを言うと、その子にとってプレッシャーになってはいけないということで、敢えてチャックには伏せて、それをずっと祈り続けたそうです。そして、その結果、チャックは牧師として、カルバリー・チャペルの創始者となって、今は世界中のクリスチャンたちに影響を与えて、私もその中の 1 人となって、皆さんもその中の勿論一員ともなったわけですけれども。生まれる前から神によって召されて行く。そういうことがあり得るということです。母の胎内にいる時から、生まれる前から祈られている子どもたちがおります。是非このことをクリスチャンの皆さんに覚えて欲しいと思います。生まれる前から祈ってあげてください。若いカップルが結婚します。子供がない場合もありますけれども、でも子供が与えられる前からもう祈ってあげてください。お母さんのお腹の中に宿ったならば、その胎児のために祈ってあげてください。「もうその子は主のものです。」と。主は必ず召して下さいます。そしてそれは恵みであります。その子がまだ何もしていない前から。有能であるかどうかは関係ありません。有害となるかどうかも分かりません。でも生まれる前から恵みによって無条件で無代価で

召されていると。素晴らしいですね。ですから恵みというのは、あなたの人生であなたが何をしようと、過去がどうであろうと、あなたの前科がどうであろうと、関係ないのです。恵みによってあなたも召されて行きます。生まれ出てからも諦めてはいけません。お腹の中で召される者もありますし、パウロの場合はずっと方向は真逆に行っていたわけですけれども、でも40歳を過ぎてから復活のキリスト出会うとパウロはキリストの使徒となって、しもべとなって、異邦人使徒となってキリストにお仕えするようになったわけです。今は、あなたの子供は教会から離れているかもしれませんが。でもある時、ひょっとしたら40歳を過ぎてから劇的な回心を経験するかもしれません。そして残された生涯を全てキリストにお捧げするようになるかもしれません。ですから諦めずに祈って下さい。祈り続けて頂きたいと思います。

パウロが伝えようとしていた福音は、**16節**を見て頂くと、御子を宣べ伝える者、イエス・キリストを宣べ伝える者。ですから、御子を宣べ伝えるということは、福音を宣べ伝えることですから、福音とは端的にイエス・キリストであるということが分かります。

そして**17節**のところ『**先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。**』とあります。この出来事というのは、**使徒の働き9:21と22節**の間に挿入される出来事です。その間に、この**ガラテヤ1:17**の出来事、また**18節**にもあります。3年間パウロはアラビヤの砂漠でイエス・キリストと水入らずのマンツーマンの時を過ごしたわけです。**ガラテヤ4:25**には、“アラビヤのシナイ山”という言葉が出てきます。アラビヤの砂漠、そこにはシナイ山、モーセがかつて10の言葉、十戒を受けた山があります。アラビヤの砂漠地帯です。モーセもそこで神との時間を過ごしました。40日40夜。バプテスマのヨハネも、そしてイエス・キリストも、主と1対1の時間をアラビヤの砂漠で過ごしたわけです。人生において砂漠のような時、ドライ・シーズン、不毛な時代。そういう時に私たちはすぐに嘆きます。実がならない。実を結ばない。全く乾ききって、ドライで、砂漠状態、不毛です。そういう時も私たちは嘆くのではなくて、そういう時こそイエス・キリストと1対1になって、キリストが啓示されるという他では味わえない神秘的な体験、霊的な体験、それを期待出来るわけです。使徒ヨハネもアラビヤの砂漠ではありませんでしたけれども、迫害の結果彼はパトモス島という所に島流しになって、そこは人の住めない島でしたが、そこで1対1でヨハネはイエスとの時間を過ごして、イエスの啓示を受けたわけです。ですからそのような不毛な時代にも、たとえ迫害されて追いやられて、もう仲間もいない。誰にも相談出来ない。話し相手がない。カウンセラーもいない。そういう時でも嘆いてはいけません。イエスがおられます。イエスがあなたの話し相手、イエスがあなたの相談相手、イエスがあなたに啓示される、これまでにないほどイエスに近づける、これまでにないほどのイエスの発見。それがドライ・シーズン、それが砂漠状態の時に、不毛な時に、あなたが体験されることです。あなたが体験出来ることです。是非主と1対1、水入らずの時を持って頂きたいと思います。

**ガラテヤ1:1**のところにも、パウロが自分の使徒職を宣言する際に、『人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです。』と。パウロの使徒職を疑う者たちに対して「人間から出たものではない。人間の手を通したものでもない。」と言っていますが、そのことをパウロは今読んだところでも繰り返しているわけです。先輩の使徒たちに会うためにエルサレムに行ったわけではない。そして、**18節**のところには『それから三年後に、私はケパを(ケパというのは、ペテロのことです。“ペテロ”はギリシャ語で、“ケパ”はアラム語です。本名は勿論シモンです。意味は「岩」です。)たずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。』エルサレム教会の重鎮です。使徒の頭ケパ、ペテロ。ペテロによってパウロは使徒になったのではないということです。たった15日間しかペテロとは一緒に時間を過ごさなかった。勘違いしてはいけないうと、パウロは言っています。「あくまで私を召された方は、イエス・キリストです。」と。「私はもうお母さんのお腹の中にいた時から召されていたのです。」と。「私の使徒としての権威は、キリストによるものだ。」とハッキリ言っているわけです。

そして、**19節**にも『しかし、主の兄弟ヤコブは別として(主の兄弟と言っても、半兄弟です。イエスの父は、父なる神です。ヤコブの父は、ヨセフです。お母さんは同じマリヤですけれども、主の兄弟と言っても、イエスの弟です。父

は違います。異父兄弟です。そのヤコブもエルサレム教会の重鎮となっております。ヤコブの手紙を書いた主でもあります。エルサレム会議を最終的にまとめたのもこのヤコブですけれども、そのヤコブは別として)、ほかの使徒にはだれにも会いませんでした。』と。ですから、ずっと3年間アラビヤの砂漠で主と1対1の時間を過ごして、使徒としての教育・訓練をすべて主から直接パウロは受けたと言っています。ペテロとは15日間しか会っていないし、主の兄弟ヤコブともほんのわずかな時間しか過ごしていないということです。ほかの使徒たちとは全く会っていない。彼らとの接点はほとんどないということです。勿論かつてパウロは教会を迫害していたので、まだパウロを恐れていた者たちもあつたでしょうし、誰もそんな者に会いたくないと思っていたのかもしれませんが。もしかしたら、アドルフ・ヒトラーがユダヤ教のシナゴグに顔を出すようなもので、ヒトラーがあれだけのユダヤ人を殺していたのに、そのヒトラーがユダヤ教に改宗して、シナゴグに、会堂に来たなんて言っても、誰も信じないわけです。「まさかそんなことあり得ない。あれだけ教会を迫害したあのサウロという憎き人物が、ユダヤ教の急先鋒のその彼がまさか。我々と同じクリスチャンになるなんて、あり得ない。」と。だから近寄らなかつたというのも事実だったかもしれません。でもいずれにしてもパウロの使徒職というのは、人によるものではないということがここでパウロによって強調されています。勿論パウロのような人物を教育出来る、訓練出来るような人もいなかつたと思います。ペテロは唯の漁師です。ですから使徒たちは雑多の集団。パウロほど聖書知識もなかつたわけです。そのパウロを誰も教えられないわけです。ガマリエルですら教えられないわけですから、パウロを教えることが出来るのはイエス・キリスト唯お一人ということになります。

最後に20～24節を読んで終わりたいと思います。『<sup>20</sup>私があなたがたに書いていることには、神の御前で申しませんが、偽りはありません。<sup>21</sup>それから、私はシリアおよびキリキヤの地方に行きました。(シリアというのは、今日のシリアも含めておりますし、キリキヤというのは、今日のトルコを含めています。キリキヤの州都というのがタルソと言いまして、タルソがパウロの出身地です。有名な学都と呼ばれて、学問の都でもあります。ローマとか、アレキサンドリアとか、そしてタルソも皆学問の都。アテネもそうです。それに並ぶ有名な町でパウロは育つたわけです。ですから、ホームタウンに戻つたということです。そして、)<sup>22</sup>しかし、キリストにあるユダヤの諸教会には顔を知られていませんでした。<sup>23</sup>けれども、「以前私たちが迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている。」と聞いてだけはいたので、<sup>24</sup>彼らは私のことで神をあがめていました。』一部の地域ではパウロの使徒職を疑うどころか、パウロの救いを疑っている者たちもあつたわけです。「本当にあんな者が救われるのか。怪しい、疑わしい。」と、懐疑的な者もあつたわけです。パウロに近寄らない者もあつたわけです。「あんな人が救われるはずがない。」でも、そんな「あんな人が救われるはずがない。」という人が救われてしまつたわけです。パウロのその劇的な回心のことで「これは奇跡だ。これは神にしか出来ない御業だ。」と言って神をあがめていた、神に栄光を帰していた者たちもあつたということです。

今日はこれで終わりたいと思うのですが、パウロはキリストによって救われ、キリストによって異邦人使徒として召されたわけです。それはすべてパウロの行いによるものではなくて、恵みによるもの。律法のエキスパートだから救われたわけではありません。なぜならば彼は、教会を迫害した者。ステパノというクリスチャンを殉教に追いやつた者でもありました。人殺しだつたわけです。その人殺しが救われて、その人殺しがキリストの使徒とされた。これは恵みでしかないわけです。ですから恵みを体験した者は皆それを神に栄光として帰するわけです。人の功績は1つもそこには差し挟まれません。パウロが凄かつたのではないのです。強いて言えばキリストが凄かつたのです。キリストが素晴らしいのです。

第一コリント6:11のところ、教会の中の人たちはかつてこういう者たちだつたということが9～10節に書かれています。『<sup>11</sup>あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。』以前はどういう者たちだつたか。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、食欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者。神の国を相続することができなかつた、地獄行が相当だつた人たち。『<sup>11</sup>あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。』以前はポルノ中毒者でした。以前は善光寺に熱心に参拝に行っていました。以前

は不倫を繰り返していました。以前はゲイでした。以前は売春をしていました。以前は盗人でした。税金をごまかしていました。万引きをする者でした。窃盗団にいましたとか。以前は貪欲な者、以前は酔っ払い、以前は略奪する者。そういう人たちが救われて、「これはまさに神業である。これはまさに神にしか出来ない奇跡の御業である。」と、多くの人がコリントのクリスチャンたちを見て神をあがめたと思われます。パウロの回心も同じだったわけです。「あり得ない。あんな人が救われるなんて。」と。この教会にもそういう人たちがいっぱいいます。牧師の私を筆頭に、あり得ないという人たち。救われてはいけない人たち。救われるに値しない人たちが、皆神の恵みによって救われたわけです。以前はこういう者たちだったという人たちが救われたわけです。

あの三浦綾子さんも救われた時、友人たちは皆「あり得ない。」と言ったそうです。「あんなにキリスト教を毛嫌いしていた三浦綾子さんが、堀田綾子さんが救われるなんてあり得ない。」と。そういう回心が今日も神の恵みによって継続されております。

『トラ・トラ・トラ。奇襲成功。』その打電をした真珠湾攻撃の総隊長の淵田美津雄という人も救われたのです。その人も伝道者として戦後日米を股にかけて、どんな迫害にも、どんな反対にもめげずに、「**イエス・キリストこそ敵を赦し、敵対している者同士の間には和解をもたらすことができる。平和の君、イエス・キリストだけが救いをもたらすことができる。**」ということをや淵田美津雄さんは語っていったわけです。

少し前には『ハマスの息子』という本が出ました。ハマスというあの過激派のイスラムのテロリストの、あのハマスです。その息子のモサブ・ハッサン・ユースフという人が、ハマス幹部の息子だったんです。創始者の息子だったんですが、その息子の彼がこともあろうにイスラエルのスパイになってしまったわけです。でもそれ以上に驚くべきことは、彼がクリスチャンになったということです。これも神の御業です。最初は信じてもらえなかったそうです。二重スパイではないか。でも彼は、今も死の危険に脅かされながらも、モサブ・ハッサン・ユースフという人はクリスチャンとして聖書を愛し、そしてイエスに従おうとしております。そして自分の父親を始めとしたハマスの人たち、イスラム教の人たち、皆騙されているのだと。その教えが、その思想が如何に危険なものか、如何に悪魔的なものか。堂々と語りながら、イエス・キリストの恵み、イエス・キリストの救いを説いています。

そのような救いの働きが今日も続いているということを知って、皆さんも是非励まされて欲しいと思います。皆さんの周りにも、家族の中にも、愛する者たちの中にも、職場にも、近所にも「この人は救われそうもない。何を言ってもこの人だけは、ダメそう、無理。絶対にこの人はクリスチャンにはならない。だって本人がそう言っているし。この人はキリスト教を毛嫌いしているし。偏見に満ちている。頑固者。頑な。他の宗教に熱心だから。」いろいろなことで私たちは、この人は救われまいと思ってしまうかもしれませんが、でも神には不可能なことは 1 つもありません。パウロの回心ほど劇的なものはないかもしれませんが、でもそれに準じるようなもの。皆さんの周りにも起こっているでしょう。そして忘れてはならないことは、あなたも救われたということです。あなたは救われてはいけない人です、本来は。地獄行が一番相応しかったのです。「失礼な。失敬な。」とあなたは言うかもしれませんが、あなたも私も罪人です。「でも、私の罪はあなたほど重くはない。」とあなたは言うかもしれませんが、すべての人は罪のないイエス・キリストを拷問し、リンチして、人間とは思えない姿に変えてしまったのです。まるでひき肉のような状態にして、もう全身は肉がむき出し、骨がもう見えてきそうな、内臓が飛び出てきそうなほどに鞭を打って、そしてその上で十字架にまで釘付けにした。そんなことを私たちはしてしまったのです。「麻原彰晃は救われないでしょう。」とあなたは言うかもしれませんが。「カルトの教祖は救われないでしょう。」とあなたは言うかもしれませんが。でも、彼らと私たちはどれほどの差があるでしょうか。異端と私たちにどれほどの差があるでしょうか。是非このことも厳粛に受け止めて頂いて、私たちは彼らと何ら変わらない者だったのに、イエス・キリストの恵みによって一方的に救われたということ。だから感謝して、そして勇気を持ってあの人にもこの人にもキリストを伝えて欲しいと思います。御子の福音を宣べ伝えて欲しいと思います。私たちが救うのではありません。その人が自分で自分を救うのではありません。イエス・キリストが救うのです。それはすべて恵みです。徹頭徹尾、恵みです。あなたの努力なんか関係ありません。その人の意志の力とか、決心とか、関係ありません。すべては恵みです。お母さんのお腹の中にいる時から選ばれている。神秘的ですけれ

ども、それが神の救いというものです。主権によって神が、召した者を、選んだ者を救うだけです。私たちにはそれがハッキリ分かりませんから、手当たり次第福音を宣べ伝えるわけです。1 人でも多くの人がイエス・キリストに出会えるように。是非、**ガラテヤ1章**はこれで終わりますけれど、恵みということをいつもテーマにして語り続けて行きたいと思えますから、いろんなことを話しても脱線しているつもりはありません。すべて恵みです。恵みから外れないように。最初から最後まで、恵みについて語るつもりですので、これは恵みとは関係ないのではないかと思わないで頂いて、すべて恵みです。厳しい内容も恵みです。きついなと思うことも、全部恵みです。目をそむけないで頂いて、耳も塞がないで頂いて、恵みのメッセージをしっかりと受け止めて、そして恵みによって救われ続けて欲しいと思えます。では今日はこれで終わりたいと思えます。